



Title	蕪村俳諧遊心
Author(s)	藤田, 真一
Citation	大阪大学, 2000, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/42973
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	藤 田 真 一
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学位記番号	第 1 5 0 6 7 号
学位授与年月日	平成 12 年 2 月 15 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文名	蕪村 俳諧遊心
論文審査委員	(主査) 助教授 渡邊志津子 (副査) 教授 伊井 春樹 教授 奥平 俊六

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、俳人と謝蕪村の文学的実体を探求しようとしたものである。蕪村をとりまく環境の中で、つまり京都という地、近世という時代において蕪村像を把握しようとし、またその作品の根底にあるものを考証している。

本論文は、全体を四章とし、24の論からなり、それに序章とあとがきを加え、全353ページ、400字詰原稿用紙にして826枚になる。

序章では、蕪村没直後の追悼集『から檜葉』から追悼の文や句を取り出し、周囲の人々を通してみる蕪村像を描き出している。

第一章「蕪村とその時代」では、蕪村の生きた時代そのものをとらえ直そうとしている。江戸期なかばにさしかかり、俳諧は全国的に大きなうねりをみせる。それは、芭蕉百回忌を目前にひかえて、蕉風を復興させようとする機運であり、中興俳諧運動と後によばれることになるものであった。蕪村が登場し、活動することになる俳壇の状況を、本書では俳人の行脚行動、芭蕉顕彰活動、芭蕉追善行事等の動きとして叙述している。

第二章「蕪村とその周囲」では、蕪村とその門人や友人の伝記的研究と、彼らの交流のようすが考察されている。とりあげられているのは、大祇、嘯山、几董、大魯である。これら蕪村周囲の俳人たちは、中興俳諧史上重要な人物であるが、従来の研究は少なかった。本章では、これらの俳人の伝記的事実を指摘し、その俳諧活動を考察している。

第三章「蕪村の俳諧」は、作品論である。Iの「俳諧の方法」では、主に作句の方法論という観点から蕪村の俳諧を考察し、IIの「俳諧の読解」では、語彙の解釈の側からその特徴をとらえようとしている。

第四章「蕪村の文人性」では、主に蕪村と漢詩の関わりを論じている。当時の漢詩文壇に流行した文芸思潮が蕪村の俳諧に大きく影響していることを指摘し、漢詩文壇との交流、漢詩の摂取がどれほど蕪村の俳諧を豊かにしているかについて考察している。

論文審査の結果の要旨

芭蕉を中心とした元禄俳諧が様々な角度から研究されているのに比して、中興俳諧の研究は進んでおらず、その中心人物の蕪村についても作品の解釈と鑑賞のみ先行し、体系的な研究はあまりなされてこなかった。本論文は、まず時代や環境をとらえ、そこに生きた人間、蕪村の実像を把握しようとしている。斬新な視点をもった好著といえるであろう。

人物論としては蕪村のみならず門人、友人らを照射し、蕪村周辺の温かく俳味あふれる俳諧環境を描き出している。それは蕪村をとりまく環境としても重要であるが、個々の俳人の伝記としても、俳諧研究史上重視されるべきものである。また一人一人の人間のおもしろさや句の深みを示そうとし、手紙の読み込みから、その発せられた状況を解釈しようとする新しいアプローチが試みられている。

作品論は、使用されている語彙の徹底した精査にもとづき、日本文学の伝統の中に一句を位置付けている。また、流行していた詠物詩の影響を指摘し、漢詩の取り入れ方を近世的「趣向」であるとしている。従来、作品の解釈は、語句や事跡の考証か、あるいは鑑賞か、どちらかに偏りがちであるが、本論文は綿密な考証の上に立ちながら、かつ一句のよさを鑑賞するという姿勢を保っている。

それは本論文全体についてもいえることである。どの章も単なる報告に終わらず、綿密な考証とともに、常に人物や作品のおもしろさを論じ、文芸性の高さを評価することを忘れない。そこには、人間蕪村が生き生きと描き出されている。文学を論じる立場として、これは高く評価されるべきである。

問題点もある。中興俳壇の中での蕪村とその一門の位置づけが明確でないことである。これは、中興俳壇の研究自体が遅れているためであり、今後進められるべきである。周囲の俳人や俳壇との比較によって、蕪村とその一門の特異性や普遍性をもっと鮮明に浮かび上がるであろう。

また、蕪村は有名な画家であった。しかし本論文では、蕪村の絵画的思考への踏み込みがやや不足している。蕪村周辺の絵画から対象イメージを形成することにより、また新たな作品解釈が生まれるはずである。

以上、問題点は含まれるものの、俳人蕪村の人と作品を、時代、環境の中でとらえた本研究は画期的なものである。今後の中興俳諧研究の課題も多く浮かび上がっており、近世文学研究への影響は大きいものがあるであろう。

よって本研究科委員会は、本論文を博士（文学）の学位にふさわしい価値を有するものと認定する。